

## 「日本人のそもそも・日本語のそもそも」（概要）

小田原史談会 OOC 報告 2020. 8. 14. 宮原諄二

### <はじめに>

報告しようとした内容は、最初は『小田原はいつから「をたはら」になったのか』でした。しかし調べていくうちに、「日本人の起源・日本語の起源」に関する記述が最近になって様変わりしていることを知りました。方針を変え、その全体像を俯瞰し、理解した範囲で報告することにします。

近年の大きな変化は、次のような出来事がきっかけになったと思います。

1. AMS（加速器質量分析法）の進歩で炭素 14 による年代測定精度が向上し、同時に日本の「水月湖年縞」が世界基準になって年代と暦代との較正精度が向上した。その結果、最初の縄文土器が 1.6 万年前に、また弥生時代の稲作開始が 3000 年前に早まった。
2. 遺伝子解析の精度・速度が上がり、コストが下がった結果、日本列島内外の古代人・現代人の遺伝子解析が数多く行われるようになり、日本人の起源に関連するアジア地域・ルートの情報が豊富に報告されるようになった。
3. 加えて、新たな遺跡の発見／発掘（ex. 青谷上寺地遺跡や南西諸島の旧石器人骨発見ラッシュ）、既存遺跡や遺物などの再調査が行われるようになった。

### <日本人のそもそも>

新たな事実が明らかになった結果、日本人の起源に関する無数の仮説の中で、『二重構造モデル』（埴原和郎 1991）が基本的には正しいと認められるようになってきていると理解しました。モデルの要約は次の通りです。（埴原和郎：「日本人の骨とルーツ」、角川書店 1997 より）

1. ホモサピエンスは少なくとも 2 万年（おそらくはそれ以上）前の時代から日本列島に住み着き、現代の日本人集団の基層となったのは東南アジアを源流とする古いタイプの原アジア人集団だった。  
（注）：現時点では日本列島最古の人骨は 3.8 万年前とされているので、4 万年前にはホモサピエンスが日本列島にいた可能性はある。遺伝子解析などの研究から、スダンランドを源流とするアジア系ホモサピエンスが旧石器時代に大陸経由あるいは海上経由で西方・南方・北方から日本列島にやって来たと考えた方がよさそうである。
2. このような日本列島に、主として弥生時代以降、大量の北東アジア系集団が渡来してきた。この渡来は 7 世紀頃（奈良時代末）までのほぼ 1000 年間にわたって続いた。  
（注）：日本に稲作及び金属器文化をもたらしたのは、中国中部の長江文明を担った集団であり、気候変動に伴う社会的混乱で難民となって九州北部に BC1000 年頃に渡来した。その後も気候変動や社会的混乱に伴って北東アジア系渡来人が古墳時代から奈良時代まで 1500 年間にわたって継続的にやって来た。
3. 渡来系集団は、まず北部九州を中心とする地域に住み着いたが、その数を増すに従って近畿地方にまで広がり、ついに朝廷を成立させるとともに、在来系集団と徐々に混血した。  
（注）神武天皇の「東征」神話とは、渡来系集団が瀬戸内海沿岸に沿って現地の縄文人と融合しながら 250 年ほどかかって稲作を近畿地方にまで伝搬させていった経緯を語っていると思われる。
4. 渡来系集団の一部は弥生時代から古墳時代にかけて東日本にも進出しその勢力を拡大した。  
（注）大和政権による渡来人の関東・東北地方への移住政策や坂上田村麻呂に代表される東北遠征などによって縄文人系統である蝦夷たちを日本列島東北部に追いやった。

その結果、

5. 在来系・渡来系集団の混血は西日本では濃く、東日本ではやや薄い。また西日本の中でも南部九州や四国では混血の影響がやや少ない。
6. 渡来系集団との混血の影響が最も少ないのはアイヌと沖縄の集団である。  
(注)：遺伝子解析の結果ではオキナワ人とアイヌ人は縄文人の影響が濃く残っている。アイヌ人はさらに北方のオホーツク人の影響が見られる。
7. 在来系・渡来系集団の混血は現在も進行中であり、日本人集団の二重構造は今でも維持されている。日本列島にみられる身体的・文化的地域性はこれら二集団の接触の濃淡によって生じたと思われる。

### <日本語のそもそも>

これまでの定説では、弥生時代初期の渡来人集団によって、それまでの「縄文人」や「縄文語」が駆逐されて「弥生語」になったとされているようでした。しかし実際にはおだやかに融合しながら連続的に変化して「弥生語」が出来上がったと理解した方が真実に近いと思います。

#### <ステップ1>：縄文語の誕生（後期旧石器時代から縄文時代：3万年間）

ヴィルム氷期の厳寒期で日本列島はアジア大陸と陸続きとなり、南方・西方・北方から様々なホモサピエンスが日本列島に到来した。後の温暖期に海面が上昇して列島は孤立するようになった。この3万年近くの実に長い期間に、多様な言語系統を持つホモサピエンスたちは列島内を拡散・混血・居住し、互いに広範囲な交易を行い、他のアジア地域とは異なる特有の遺伝子を持った“縄文人”や基層語としての“縄文語”が誕生した。

#### <ステップ2>：弥生語の誕生（弥生時代から古墳時代：1500年間）

地球気候の寒冷化に伴う中国の内乱により長江文明が衰退して難民が発生し、3000年前頃に稲作・金属器文化を持った渡来人集団が直接または朝鮮半島経由で九州北部に渡来し、稲作が始まった。渡来人の到来は古墳時代から奈良時代まで断続的に続く。

渡来人と列島内の縄文人との間で混血が進んで「弥生人」が誕生し、異言語同士の接触によりピジン語化したのちクレオール語化して母語としての弥生語（原日本語）が誕生するようになる。稲作の弥生人集団は縄文人よりも人口増加率が高く、軍事力も含めてパワフルな集団に成長していく。

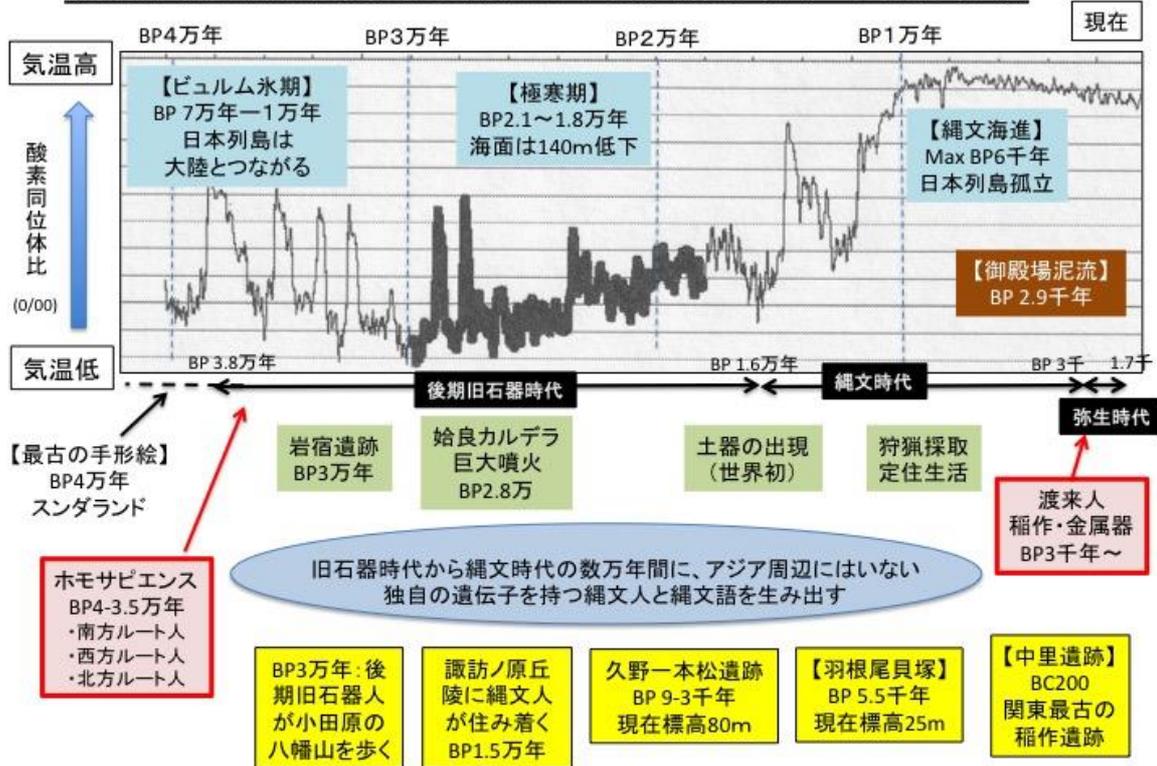
九州北部の弥生人集団が瀬戸内海沿岸に沿って稲作と弥生語を伝搬させ、各地の部族（出雲など）との内乱を経て、4～5世紀頃にヤマト王権が成立する。その後の大和朝廷が支配する地域では弥生語が、その周辺では縄文語が残るとの二重構造が存在するようになる。方言として現在でも影響が残っている（ex. 東北地方と出雲地方）。

### <おわりに>

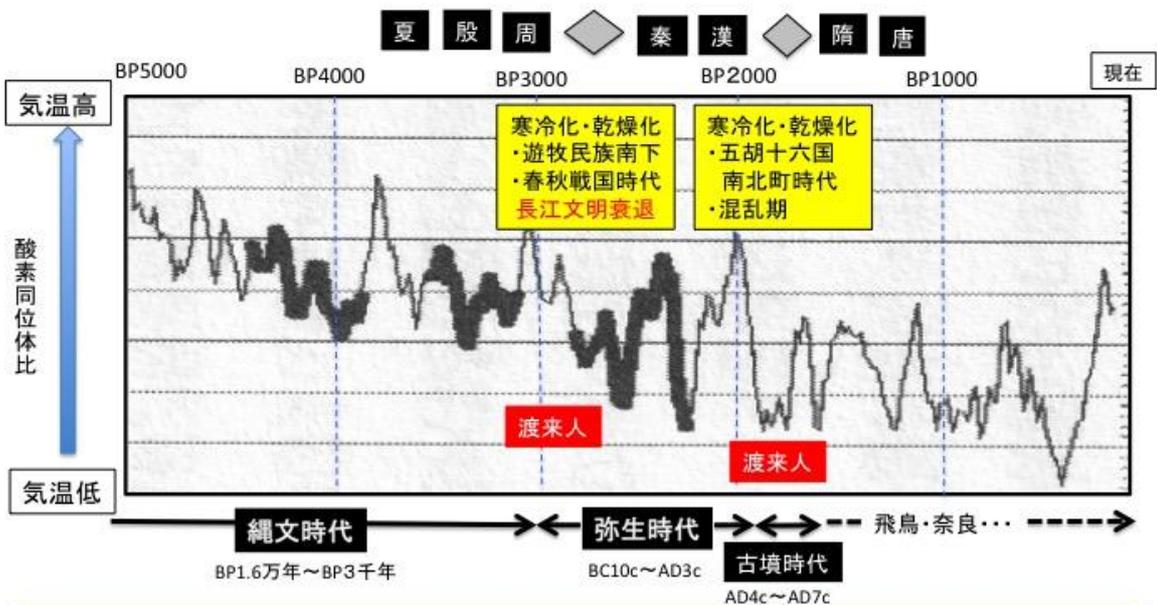
1. 「日本人のそもそも・日本語のそもそも」のストーリーは、いずれも基本的には日本人集団が成立していった旧石器時代以降の『二重構造モデル』の中にあるようです。さらなる「核ゲノム DNA 解析研究」の進展によって、日本列島に集まって来たさまざまな人類たちの遺伝系統の詳細が明らかになっていくことを期待したいと思います。
2. 「日本語のそもそも」については、「縄文語」が「弥生語」（原日本語）になっていく過程を理解する必要がありそうです。それにはピジン語・クレオール語の成立過程の研究が大いに参考になりそうだと思います。この分野は大航海時代以降の植民地支配での必然性から欧米での長い研究の歴史があるようです。人類学・言語学・遺伝学などの多様な分野を総合した「日本語のそもそも」研究報告が出てくることを期待したいと思います。

私の理解の間違いが多々あるかもしれません。今後とも修正していきたいと思ひます。 ◆

## 最終氷期の気温変動と原始日本(旧石器時代～縄文時代)



## 気候変動と古代日本(縄文時代～弥生時代～古墳時代)



弥生期から古墳期にかけて、寒冷化・乾燥化に伴う中国内の混乱で大陸から渡来人が高い文化(稲作・金属器・文字...)を持って北九州地域に継続的にやってきた。縄文人との間で混血が進み弥生人となり、両言語の間でピジン化・オリオール化して弥生語となった。弥生人は瀬戸内海を東征して近畿地方にヤマト政権を樹立する